

9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 1 2 3 4 5

306

5

拓舊九成宮醴泉銘

始



306
5

拓舊
九成宮醴泉銘



北成宮醴泉銘

秘書監檢校侍

中鉅鹿郡公臣

魏徵奉勅撰



維貞觀六年孟夏之
月皇帝過者乎九
成之宮此則隨之仁
壽宮也冠山拔殿絕

壑為池躋水架楹分
巖竦閣高閣周建長
廊起棟宇睒葛臺
榭參差仰視則造造

百尋下臨則崢嶸千
仞珠璧交暎金碧相
暉照灼雲霞蔽虧日
月觀其杉山迴澗窮

泰極侈人從欲良
足深尤至於炎景流
金無鬱蒸之氣微風
徐動有淒清之涼信

安體之佳所誠養神
之勝地漢之甘泉不
能尚也皇帝爰在
弱冠經營四方逮乎

立年撫臨億兆始以
武功壹海內終以文
德懷遠人東越青丘
南踰丹徼皆獻琛奉

費重譯來王
臺北 報玄關並地列
州縣人充編戶氣
年和近安遠肅群生

咸遂靈既畢臻雖藉
二儀之功終資
人之慮遺身利物
風沐雨百姓為心憂

勞成疾同堯肌之如
腊甚禹足之臍脰針
石屢加膝理猶滯爰
居京室每弊炎暑群

下請建離宮庶可怡
神養性，聖上愛一
夫之力惜十家之產
深閉固拒未肯俯從

以為隨氏舊宮營於
曩代棄之則可惜毀
之則重勞事貴因循
何必改本於是斷彫

為樸損之又損去其
泰甚葺其頽壞雜丹
墀以沙礫間粉壁以
塗泥玉砌接於土階

茅茨續於瓊室。仰觀
壯麗。可作鑒於既往。
俯察。畢儼。足垂訓於
後昆。此所謂至人無

為大聖。不作彼竭其
力。我享其功者也。然
昔之池沼。咸引谷澗。
宮城之內。本乏水源。

求而無之在乎一物
既非人力所致聖
心懷之不忘學以四
月甲申朔旬有六日

己亥至及中宮應
臨見臺觀閑步西城之
陰晴高閣之下俯
察厥土微覺有潤回

而以杖築之有泉隨
而涌出乃承以石檻
引為一渠其清若鏡
味甘如醴南注丹霄

之右東流度於雙關
貫翠青瑣縈帶紫房
激揚清波滌蕩瑕穢
可以導養正性可以

激瑩心神
映群形
潤生萬物
同湛息之
不竭將玄
澤之常流
匪唯乾象
之精蓋亦

坤靈之寶
謹案禮緯
云王者刑
殺當罪賞
錫當功得
禮之宜則
醴泉出於
闕庭鵬冠

子曰聖人之德上及
太清下及太寧年及
萬靈則醴泉出瑞應
圖曰王者純和餘食

不貢獻則醴泉出飲
之令人壽東觀漢記
日光武中元元年醴
泉出京師飲之者痼

疾皆愈然則神物之
來寔扶明聖既可
蠲茲沉痾又将延彼
遐齡是以百辟卿士

相趨動色我后固
懷羈挹推而弗有雖
休勿休不徒聞於往
昔以祥為懼實取驗

於當今斯乃上帝
玄符天子今德豈
臣之未學所能丕顯
但職在記言屬茲書

事不可使國之盛美
有遺典榮敢陳實錄
爰勒斯銘其詞曰
惟皇撫運奄壹稟

宇千載膺期萬物斯
覩功高天霽勤深伯
禹絕後卷前登三邁
五握機蹈矩乃聖乃

神武克禍亂文懷遠
人書契未紀開闢不
臣冠冕並龍琛贊咸
陳大道無名上德不

德玄功潛運幾深莫
測鑿井而飲耕田而
食靡謝天功安知帝
力上天之載無臭無

聲萬類資始品物流
形隨感變質應德效
靈不焉如響音赫赫明
明雜遝景福歲蕤繁

社雲氏龍
宮龜圖鳳
紀日含五
色鳥呈三
趾頌不輟
工筆無停
史上善降
祥上智斯

悅流謙潤
平潺湲皎
潔萍旨醴
甘冰凝鏡
澈用之日
新挹之無
竭道隨時
泰慶與泉

流 我后夕惕雖休
帝 休居崇茅宇樂不
般 遊黃屋非貴天下
為 憂人玩其華我取

其 實員還淳反本代文
以 質居高思墜持滿
戒 溢念茲在茲永保
貞 吉

無太子率更令
海內臣歐陽
詢奉
勅書

九成宮醴泉銘

秘書監檢校侍中鉅鹿郡公臣魏徵奉勅撰。維貞觀六年孟夏之月，皇帝避暑乎九成之宮。此則隨之仁壽宮也。冠山抗殿，絕壑爲池，跨水架楹，分巖竦闕，高閣周建，長廊四起，棟宇膠葛，臺榭參差，仰視則蓋蓋百尋，下臨則嵒嵒千仞，珠璣交映，金碧相輝，照灼雲霞，蔽虧日月，觀其移山廻澗，窮泰極侈，以人從欲，良足深尤。至於炎景流金，無爵蒸之氣，微風徐動，有淩清之涼，信安體之佳所，誠養神之勝地，漢之甘泉不能尚也。皇帝爰在弱冠，經營四方，逮乎立年，撫臨億兆，始以武功壹海內，終以文德懷遠人。東越青丘，南踰丹徼，皆獻琛奉贄，重譯來王。西暨輪臺，北拒玄闕，並地列州縣，人充編戶。氣淑年和，邇安遠肅，群生成遂，靈貺畢臻，雖藉二儀之功，終資一人之慮。遺身利物，櫛風沐雨，百姓爲心，憂勞成疾，同堯肌之如腊，甚禹足之胼胝。針石屢加，膝理猶滯。

爰居京室，每弊炎暑。群下請建離宮，庶可怡神養性。聖上愛一夫之力，惜十家之產，深閉固拒，未肯俯從。以爲隨氏舊宮，營於曩代，棄之則可惜，毀之則重勞。事貴因循，何必改作。於是斷彫爲撲，損之又損，去其泰甚，葺其頹壞，雖丹雘以沙礫，開紛辟以塗泥，玉砌接於土階，茅茨續於瓊室，仰觀壯麗，可作鑒於既往，俯察卑儉，足垂訓於後昆。此所謂至人無爲，大聖不作，彼竭其力，我享其功者也。然昔之池沼，咸引谷澗宮城之內。本乏水源，求而無之。在乎一物，既非人力所致。聖心懷之不忘。粵以四月甲申朔旬有六日己亥，上及中宮，歷覽臺觀，閑步西城之陰，躊躇高閣之下。俯察厥土，微覺有潤，因而以杖藥之有泉。隨而涌出。乃承以石檻，引爲一渠。其清若鏡，味甘如醴。南注丹青之右，東流度於雙闕，貫穿青瑣，綈帶紫房，激揚清波，滌滌取穢。可以藥養正性，可以澆瑩心神，變嘆群形，潤生萬物，同湛恩之不竭，將玄澤常流。匪唯乳象之精，蓋亦坤靈之寶。謹案禮緯云：王者刑殺當罪，賞錫當功，得禮之宜，則體

泉出於闕庭。編冠子曰。聖人之德上及太清下及太
寧中及萬靈則體泉出。瑞應圖曰。王者純和飲食不
貢獻則體泉出。飲之令人壽。東觀漢記曰。光武中
元元年體泉出京師。飲之者痼疾皆愈。然則神物之
來寔扶。明聖。既可獨茲沈痼又將延彼遐齡。
是以百辟卿士相趨動色。我后固懷搗搗推而弗有。
雖休勿休不徒聞於往昔以祥爲懼實取驗於當今。斯
乃上帝玄符天子令德豈臣之末學所能丕顯。但
職在記言屬茲書事不可使國之盛美有遺典策。敢
陳實錄爰勒敢銘。其詞曰。
惟皇撫運奄登寰宇。千載膺期萬物斯視。功高大
舜動深伯禹。絕後光前登三邁五。
握機蹈矩乃聖乃神。武克禍亂文懷遠人。書契未紀
開闢不臣冠冕並纘琛寶成陳。
大道無名上德不德。玄功潛運幾深莫測。鑿井而飲
耕田而食靡謝天功。安知帝力。
上天之載無臭無聲。萬類資始品物流形。隨感變質
應德效靈。介焉如響赤芥明明。雜運景福葳蕤繁祉

を以て欲を從(縱)いましにするを觀れば、良に深く尤むるに足れり。
貴景金を流せども、雲蒸の氣無く、微風徐らに動いて、清涼の涼有るに
至つては、信に安體の住所、誠に養神の勝地、漢の甘泉も尙る能はざる
なり。
皇帝爰に在ること弱冠、四方を經營し、立年に達んで、億兆を撫臨し、
始には武功を以て海内を壹にし、終には文德を以て遠人を懷く。東は
青丘を越え、南は丹雘(微の俗)を踰え、皆琛を獻じ贊を奉じ、譯を重
ねて來玉せり。西は輪臺に暨び、北は玄關に拒るまで、地を並べて州縣
に列し、人編戸に充つ。氣淑年和し、運きは安く遠きは肅かに、群生成
遂げ、靈殿畢く臻るは、二儀の功に藉ると雖も、終に一人の處に資る
身を遣れて物を利し、風に、櫛り雨に沐ひ、百姓を心となし、憂苦して
疾を成せるは、堯の肌の脂の如きと同じく、禹の足の胼(胼)よりも
甚し。針石屢々加ふれども、腫理猶滯せり。
爰に京室に居りて、毎に奕奕に弊る。群下請ふらく、離宮を建て、鹿ぐ
ば神を怡ばせ性を養ふ可しと。聖上一夫の力を受み、十家の産を惜み、
深く閉(閉)ち固く拒みて、未だ宵(宵)て俯從せず。以爲らく、隨(隨)
氏の舊宮、異代に營めり。之を棄つれば則ち惜しむ可く、之を毀たば則
ち勞を重ぬ。事は因(因)循を貴ぶ。何ぞ必ずしも改め作らんと。
是に於て彫を彌(彌の正字)り樸(樸)となし、之を損じて又損じ、其

雲氏龍宮龜圖風紀。日含五色鳥呈三趾。頰不輟工筆
無停史。
上善降祥上智斯悅。流謙潤下潺湲皎潔。薛旨體甘
冰凝鏡徹。用之日新挹之無竭。道隨時泰慶與泉流。
我后夕惕。雖休弗休。居崇茅宇樂不般遊。黃屋非
貴天下爲憂。
人玩其華我取其實。還淳反本。代文以質居高思墜
持滿戒溢念茲在茲永保貞吉。
兼太子率更令勃海男臣歐陽詢奉勅書。

釋文

秘書監、檢校(又檢校に作る)侍中、鉅鹿郡公、臣、魏徵勅(勅に通ず)
を奉じて撰す。
維貞觀六年孟夏の月、皇帝著を九成の宮に遷く。此れ則ち隨(隨)の
仁壽宮なり。山に冠して殿を抗げ、壑を絶ちて池と爲し、水に跨りて橋
を架し、巖を分ちて閣を練て、高閣周り建ち、長廊四もに起り、樓宇
葛(輶)の假借)し、臺・閣參差し、仰ぎ視れば則ち遠望(遠望の別體)
百尋、下に臨めば則ち峻嶒千仞、珠壁交々映じ、金碧相輝き、雲霞を照
灼し、日月を蔽虧し、其の山を移し測を廻らし、泰を窮め修を極め、人

の泰其を去り、其の類(類)を奪(奪)き、丹雘(雘)に難ふるに
妙機を以てし、粉壁(壁)に間ふるに塗泥を以てし、玉砌は土階に接し、
茅茨は瓊室に續く。仰いで壯麗を觀れば靈を既往に作す可く、俯して卑
儉を察すれば、測を後昆に垂るゝに足れり。此れ謂はゆる、至人は爲す
無く、大聖は作らず、彼其の力を竭し、我は其の功を享くる者なり。
然るに昔の池沼は、咸谷洞を宮城の内に引けり。本水源に乏しく、求む
れども而も之れ無し。在るの一物は、既に人力の致す所に非ず。聖心之
を懷うて忘れず。粵に四月甲申朔旬有六日己亥を以て、上及中宮、臺
觀を歴覽し、西城の陰に閑歩し、高閣の下に躊躇す。厥土を俯察するに
微に潤有るを覺ゆ。因りて杖を以て之を渠(導)くに泉有り。隨うて涌
き出づ。乃ち承くるに石梁を以てし、引いて一渠となす。其の清きこと
鏡の若く、味の甘きこと醴の如し。南は丹青の右に注ぎ、東は雙闕に流
度し、青瑣を貫穿し、紫房を榮帶し、清波を激揚し、瓊樓を滌蕩す。以
て正性を渠(導)養す可く、以て心神を澄淨す可く、群形を鑿映し、萬
物を潤生するは、淇恩の竭きざるに同じく、玄澤の常流に將く。唯に乾
(乾)象の精のみに匪ず。蓋し亦坤靈の寶なり。
謹んで案(按)の假するに、禮緯に云ふ。王者の刑殺罪に當り、賞錫(賜)
功に當り、禮の宜しきを得れば、則ち醴泉闕庭に出づと。編冠子曰く。
聖人の徳上は太清に及び、下は太寧に及び、中は萬靈に及ぶときは、則

醴泉出づと。瑞應圖に曰く。王者純和なれば飲食貢獻せざれども、則ち醴泉出づ。之を飲めば人をして壽ならしむと。東觀漢記に曰く。光武中元元年、醴泉京師に出づ。之を飲む者は痼疾皆愈（瘥の假）ゆと。然らば則ち神物の來るは、寔に明聖を扶く。既に茲の沈痾を瀆く可く、又將に彼の遐齡を延べんとす。

是を以て百辟・卿士、相趨りて色を動かす。我が君固より爲抱を懐き、推して有せず。休すと雖ども休する勿きは、徒だに往昔に聞くのみならず、祥を以て懼となすは、實に驗を當今に取れり。斯れ乃ち上常の玄符（符）、天子の令徳、豈に臣の末學の能く不順する所ならんや。但願記言に在り。茲の書事に屬し、國の盛美をして典策（策）に遺すこと有らしむ可からず。敢て實録を陳べ、爰に斯の銘を勒す。其の詞に曰く。

惟れ 皇、運を撫し、寰宇を奄登す。千載の期に膺り、萬物斯れ視はる。功は大舜よりも高く、勳は伯禹よりも深し。後を絶ち前に光き、三に登り五に邁る。

機を握り矩を蹈（踏）み、乃ち聖に乃ち神なり。武は亂亂に克ち、文は遠人に懐く。曹契未だ紀せず。開闢より臣たらざるも、冠冕並び（襲）ぎ、琛寶（寶）威陳ぬ。

大道は名無く、上徳は徳ならず。玄功潛運し、幾んど深き淵る莫し。井を鑿（鑿）ちて飲み、田を耕して食ひ、天功に謝する靡し。安んぞ帝の

力を知らんや。

上天の載は、臭も無く聲も無し。萬類資つて始め、品物形を流く。威に隨ひて質を變じ、徳に應じて靈を效す。介焉として響の如く、芥芥（蘇芥）（蘇）（蘇）（明）（明）たり。

維運せる景福、葳蕤たる繁祉、雲氏・龍宮、龜圖・鳳紀。日は五色を含み、鳥は三趾を呈す。頤は工を輾めず、筆は史を停むること無し。（工は頤を輾めず、史は筆を停めず）の倒句。）

上善祥を降し、上智斯れ悅ぶ。謙を流し下を潤し、潺湲皎潔たり。萍旨（旨）く醴甘く、冰（氷）凝れば鏡徹す。之を用ふるも日に新たに、之を抱めども竭くる無し。

道は時に隨ひて泰く、慶は泉と興に流る。我が后夕に惕たり。休すと雖も休せず。居は茅宇を崇くし、樂は般遊せず。黃屋貴きに非ず、天下を憂となす。

人は其の華を、玩び、我は其の實を取る。淳に還り本に反る。文に代ふるに質を以てし、高きに居りては墜つるを思ひ、滿を持しては溢るゝを戒（戒）め、茲を念ひ茲に在れば、永く貞吉を保つ。

兼太子率更令、勃海男、臣、歐陽詢勅を奉じて書す。

昭和十二年五月廿五日 印刷納本 定價 貳圓
昭和十二年五月廿八日 發行
發行所 赤城出版社
東京市牛込區原町二ノ二三
製本所 東京市牛込區原町二ノ二三
印刷所 東京市牛込區原町二ノ二三
明治印刷株式會社

306

5

終